

「いわんや悪人をや」

藤元正樹師述

何が仏さまをして仏さまたらしめるとか、だから華座のことを信心というのです。お浄土をみて、何を見つけたかというのと、信心を見つけたんです。それが観經の華座觀。座を見れば、その次にでてくるのが仏さまの像です。それを像觀という。これが八番目。

その像觀から次が真身觀。仏さまの本当の身、これみな仏さまです。仏さまの身体を見たら、仏さまを見たとはいえん。みんな、仏さまを見たいというけれど、みんな遇うてきているんです。だけど、仏さまとは思わない。

大概、鬼と違ってるんです。その証拠に、自分の息子に聞いてみなさい。お前、この世で一番嫌いなのは誰やと。そしたら、大概、親父やというでしょう。その次はおふくろや。その次は学校の先生。そんなもんでしょう。

本当に自分を支えてくれた人を、自分を育ててくれた人を仏とは見えない。鬼と見るくらいがおちでしょう。結局は、仏法にあるといっても、仏法に生きた人に会うしかないのです。生きた人にあう、それも観經が示しているのです。

もう時間がないですが、仏教に六十憶劫一刹那という言葉がありますが、あなたの方でも本当に仏法を聞いていたら、時間のたつのを忘れてしまうのです。碁をうっていたら、時間のたつのを忘れてしまうでしょう。

結局、章提希夫人は、七番目の華座觀において仏さまを見た。その仏さまを見たことを次々に説いていられるのですが、仏さまの本当のお姿、仏さまをとりまく觀音觀、勢至觀とかを「仏さまとは何だ」と自分で説いていられるうちに、十四番目に至って、お釈迦さま自身がみえてきた。ここらあたりが面白いのです。

くりかえしますと、章提希夫人は、第七華座觀で無量寿仏をみたといわれる。つまり、お釈迦さまの上に阿弥陀さまを見た。見たとたんに、「私が死んだら、自分の子、阿闍世が、今度はどうやったたら仏さまをみる事ができるんでしょうか」といって、お釈迦さまに尋ねたら、お釈迦さまが、像觀、真身觀、觀音觀、勢至觀と、ずっと、仏さまとはどういうものかと説明された。そして説明している間に、お釈迦さま自身が、「自分の説いている仏法とは、一体何だったんだろう」と、お釈迦さま自身が、今度は、自分自身に問題をみつけだされた。

つまり、第十三番目までは、定善を説いたお経で、これは章提希夫人の要求によって説かれた教えだが、十四番目になると、これは自問自説の經と申しまして、誰も問いはしないのにお釈迦さまが自分で自分自身に「一体、私が説いた仏法とは何だったのだろう」と自問自説されたのです。

これが十四番目の一番最初に、「もし衆生ありて、かの國に生まれんと願すれば、三種の心を發して、すなわち往生す。何等をか三つとする。一つには至誠心、二つには深心、三つには回向發願心なり。三心を具すれば必ずかの國に生ず」といってあるものです。これを三心といいます。信心といいますが、この三つの心が中身です。

これは説明していたら時間が長いかかりますので簡単にしますけれど、最初にてくのが至誠心。この至誠心を善導大師は眞實心と訳したのです。その至誠心というのは、今の言葉でいうと、至というのには、徹底するということ、自分自身に対して徹底するということです。自分というものを徹底する心、これを至誠心というのです。

至誠心の誠というのは、「まこと」という字です。新撰組の「誠」です。今日の言葉で言えば忠誠心。忠誠心といったって仏さまに忠誠を励めとか、神さまに忠誠しろ、なんて

のじゃないんです。

己自身に忠誠心を持って、という意味です。自分自身の人生に真面目なれど。人生は二度とない、これ一回きりのいのちなんです。この一回きりのいのちに誠を尽すといっているのが至誠心。では、誠を尽したらどうなるかという、あかんということがわかるということです。

つまり、はじめて善とか悪とかという言葉の中身が見えてくるんです。いくらいいことをしても、人間というものは、いいことをする根性が、虚仮雑毒だといっているんです。

善導大師は、虚仮雑毒ということとは、毒が混じっているというんです。毒という場合、仏教では三毒というのです。「貪欲」、「瞋恚」、「愚痴」の三つをいうんです。毒というのは、人間自身を殺すもの。なんで毒やといったら、なんぼ人に対していい事をして、その心の根にはいい事をしなればならないという心がある。子供をいい子に育てて、自分が楽をしようとする心、それを貪欲。

瞋恚は、これだけのことをしているのにこれだけしかしてくれん、すぐに文句がついてくるんです。そして、結局は愚痴でしょう。それを虚仮雑毒の善というんです。

何か、悪、悪というけれど、いいことが

できんです。人間は本来、浄土往生の定業をなすことあたわずと。

それがわかった時にはじめて悪ということがわかってくるんです。しかも、そのことが見えてきた時に「しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず」、「悪をもおそるべからず」という、これは歎異抄のお言葉ですが、善も必要でない、悪も恐れることはない、ということがいえるのです。

「念仏にまさるべき善なきゆえに」、「弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえに」と。これも歎異抄のお言葉ですけれど、私たちは「いわんや悪人をや」という言葉の中には、「自分は善人で、他に悪人がいる」という意味じゃないですよ。

「いわんや悪人をや」という言葉は、阿彌陀さまの声を聞いた時に、はじめて「いわんや悪人をや」の意味が見えてくるはずですよ。何か、この言葉だけ取り上げて、悪人ということを問題にしていますと、実はその言葉から生まれてくる背景、つまり、観無量寿経では、阿闍世とか調達（提婆）とは悪人です。

その悪人が救われるんです。阿闍世は「われ、五百才の間、阿鼻獄にありとも後悔せん」といっていますよ。つまり、地獄におちても後悔せん。「地獄は一定すみかぞかし」の

言葉がでてくるもとなんですけれども、悪人という言葉の中には、実はどこかに転がっている悪人という意味ではなしに、親鸞は自分自身を見ているんです。「いわんや悪人をや」と。

そういうことをもう少しお話ししたかったですけれど、時間が大幅に超えましたので、今回はこれくらいにおいておきます。御苦勞さまでございました。

（こらは、一九八六年十一月二日、西宝寺での藤元正樹師による和光仏教青年会主催の講演会のテープをおこしたものです）

